

目次

はじめに

1 敗戦後の在日朝鮮人の帰還

敗戦直後の帰還ラッシュ

「皇国臣民」から一転、日本国籍から放り出された在日

朝鮮戦争勃発と在日の分断

2 北朝鮮帰国事業の概要

北朝鮮の思惑

日本社会で疎外された在日

北朝鮮政府と朝鮮総聯による宣伝、惹句

3 聞き取り調査の目的

4 調査の概要

調査方法

対象者の選定と限界

対象者の内訳

5 凡例

北朝鮮地図

帰国事業による帰国者数の年次推移

関連年表

本書に登場する帰国者のプロフィール

40

39

38

37

第1章 10人の帰国前史

朴永淑——原爆を見た一家 勉学を夢見て帰国

梁姉弟——「朝鮮人が大嫌いだっただ」

金綾実——差別と貧困 5人の子を抱えた母の決断

朝鮮学校生徒らの場合

金五月——ウリ学校を守れ スクラム組んで闘争

姜鐘太——朝鮮人としての魂植えつけたい 父の想い

帰国運動の高揚と活動家たち

金奎錫——社会主義の未来を信じ、革命を志す

川崎栄子——「自分が社会主義を経験しないと」

日本人妻・上田つたえ——活動家の夫と出会い、宣伝を信じた

総聯の帰国勧誘宣伝

新潟へ

李昌成——「柔道で大成したい」単身帰国を決意

帰国意思の確認

朴永淑——父危篤の知らせで残留を翻意

第2章 清津ショック——失意で始まった祖国での暮らし

強烈な臭い、みすぼらしい人々——「騙された！」

初めて見えた祖国・朝鮮

想像を絶した人々の姿

「降りない」下船を拒否する人

役人に直談判「来た船で日本に帰ります」

招待所で窓ガラスを叩き割る

残飯をねだる先着の帰国者たち

ある少女の到着

配置の明暗——平壤エリートから農場員まで

運命を左右した4つの要素

配置先の決め方

平壤への配置、「文化人」として幹部待遇

技術を買われて都市の旋盤工に

水洗便所のあるアパートに入居

山中の鉾山へ、下っ端の労働者に

幹部として優遇されたと思ったら

農場に配置され、空腹の日々を過ごす

最果ての地に送られた一家

第3章 北朝鮮社会へ組み込まれた帰国者たち

国家一元管理の食・住・労働システム

絶対的に足りない食糧配給

住宅

衣料品、靴

売り食い生活

「トラック2台」「3年分」の物資を持参

物資を売り尽くした後の悲惨な生活

盗み食いまでした

学校は楽しみもいじめも

物珍しい帰国者の存在

思想教育

大学進学

荒れた帰国者の若者たち

革命を夢見た青年の失望

60年代の脱北企図

最初の逃亡成功者

関東派 VS 関西派 愚連隊の東西対決

不良帰国者を制圧せよ

第4章 帰国者コミュニティの形成と最初の粛清

結びつく帰国者——交遊と結婚

帰国者にとっての日本語

結婚は帰国者同士

呉明子の結婚

現地住民から結婚を反対されたケース

中国からの帰国者との結婚

労働党入党と軍入隊

労働党員になるということ

帰国者は党員になれない？

人民軍入隊

帰国者に対する差別と制限

狙われたインテリ総聯幹部

東京朝鮮中高の元教員たち

総聯幹部たちの粛清

日本人母の決断

東京朝高卒業生・姜鐘太の回想

なぜ在日エリートが標的になったのか？

第5章 朝鮮人を愛した日本人妻たち

1830人を超える日本人妻

日本人妻の扱いをめぐる日朝の動き

北朝鮮政府の日本人妻への配慮

小林秋子

夫の家族の反対を押し切って結婚

「何も知らなかった。分かっていたら、誰が行くの？」

1年間泣き暮らした

同じ帰国者から差別された

齋藤博子

「日本人妻は3年で里帰りできる」と説明された

夫は荒れ、日本人の義姉は事故死

「半チヨッパリ」という蔑称

子供から見た日本人のオモニ

1 突撃隊に志願、党員にも——果敢に生き抜いた母

両家の反対にも意思貫き結婚

帰国1年で夫が死亡、働きづめで4人育てる

日本とは絶縁、極貧を生き抜く

2 適応できず生涯引きこもった母

金持ちの朝鮮人に嫁いだ——羅真弓の母

朝鮮語を話せないまま45年——尹玉順の母

母を「日本野郎」と呼んで後悔——姜鐘太

第6章 監視・密告、政治犯収容所

金日成一人独裁の確立

「唯一思想体系」とは何か？

政治犯収容所とは何か？

耀徳管理所での実体験

1 耀徳管理所の「在日村」に収監——具龍徳

兄が差別から帰国を切望

「これから一生出られない所へ引越す」

天然の要塞、耀徳郡

管理所内にできた「在日村」

管理所内の学校生活

出所

収容所送りの真相

2 兄2人、息子2人が連行された——朴永淑

兄2人が立て続けに連行

長男も次男も連行され、帰って来なかった

家族全員が僻地に追放される

3 「マル反動」で収容所送り——沈博仁

父が保衛部に連行

父の罪の真相

酒席で「金正日はロシア生まれだ」

監視対象になった帰国者

極度に怯えていた出所者

友人、知人の相次ぐ連行

「大村帰り」がやられた

帰国者同士で監視・密告させる

第7章 70年代帰国者「サイキンカエリ」

再開された帰国事業——彼らはなぜ帰ったのか

帰国事業終了から再開の経緯

徐々に改善された在日の暮らし

李きょうだい——「オッパ、祖国に行こう！」

張姉妹——ピンク・レディー世代、青春真っ盛りで

呉小元——工作員の父に命じられ「人質」帰国

70年代の北、衝撃と緊張

曹分姫——「来るなって書いたのに」

張姉妹——「親を恨みました」

李きょうだい——砕けた大学進学之梦

呉小元——平壤の大学での緊張とストレス

「サイキンカエリ」と「ムカシカエリ」の溝

60年代帰国者の興味の的に

60年代帰りの荒みように驚く

仕送りのない帰国者は「ゲンチャン」化

第8章 回復した日本との絆

訪問団と在日マナー 激変した暮らし

1 親族の支援で底辺から天国へ

荷物も車も「何でも送ってくれた」

平壤の道路補修をした叔父のおかげで

「死ぬまで恩を忘れない」帰らなかった兄の想い

「宝船が来た！」

2 特別扱いされた「総聯幹部子女合宿」

別世界の生活「建物と空気と水以外は日本製」

3 日本円の使用解禁

外貨商店と「バックトン」の登場

外貨商店で「スター気取り」

4 帰国者間で生まれた天と地の格差

金持ち同士で付き合う

外国の支援物資を犬に食べさせた

日本との窓口・元山の悲哀

10年ぶりの再会 喜びと惨めさと

日本人の母も訪朝 共に過ごす最後の時間

金政権を揺さぶった在日マネーと情報

1 侵食された「社会主義の倉庫」

「黄金万能主義」

2 日本から流れ込む外部情報

日本のビデオが大流行

一網打尽にされた幹部子女

元山の富裕帰国者は収容所送りに

第9章 「苦難の行軍」 90年代の大飢饉と社会混乱

大混乱の前奏曲

社会主義陣営の瓦解と金日成の死

「未供給」 Ⅱ 配給停止の始まり

金日成が死んだ日

三年喪と社会パニックの発生

国家財産の横流し 黄海製鉄所での事件

飢えと病気で世を去った帰国者たち

脳裏に刻まれた3人の最期

最期の言葉は「ぜんざいが食べたい」

日本人妻の「苦難の行軍」

周囲の日本人妻が次々死亡——上田つたえ

不法行為に手を染める 夫と娘2人が死亡——齋藤博子

キャベツの葉も拾って食べた——小林秋子

黄美京の母の最期

生きるための闘い

担ぎ屋になった女性たち

暴力と日銭暮らしに耐えかねて

米100キロを担ぐ

中国に脱出した帰国者たちとの出会い

黒竜江省で潜伏生活をしていた朴文俊

混乱に商機を見出す

日本の中古車貿易で月2千ドル

第10章 帰国者たちのその後

韓国と日本に約600人の脱北帰国者

日本に戻る道

1 日本公館に保護されて入国

梁葉津子、敏雄姉弟

金栄三

川崎栄子

有元俊

越境ビジネス

齋藤博子

平島筆子

上田つたえ

2 東南アジアルート

小林秋子

張智潤、美淑

尹尚吉と黄玉香

韓国入りした帰国者

姜鐘太

黄美京

李泰旻

金奎錫

エピローグ 残された在日家族の苦悩

489

家族10人をひとりで60年支え続けた——林恩善

脱北民に寄り添い、声を届ける——朴香樹

応えられなかった叔父からの手紙——辛淑玉

おわりに

513

註

520

主な参考文献

529

はじめに

1 敗戦後の在日朝鮮人の帰還

敗戦直後の帰還ラッシュ

1910年に日本が朝鮮を併合した後、日本へ渡航する朝鮮人が年を追って増えていった。多くは貧しい農村に暮らしていた人たちで、日本の労働力需要に吸い寄せられる形で渡航する場合が大部分であった。日本に生活基盤ができ始めると、故郷の家族や知人を呼び寄せたり、婚姻して日本で家庭を築いたりする人が増える。内務省統計によると、11年に2527人だった在日朝鮮人人口は、30年に29万8091人、35年には62万5678人に及んだ^{*1}。

産業拠点のある都市部や炭鉱、鉾山、大小の土木建設工事現場が主な働き口になり、大阪や東京、兵庫、愛知、京都、神奈川、福岡、山口などとその周辺に朝鮮人の多住地域が形成された。日本に近い慶尚道^{キョンサンド}、済州島^{チェジュド}、全羅道^{チョルラド}、忠清道の出身者が大部分で、それは現在の在日朝

鮮人の出身地構成に引き継がれている。

日中戦争の長期化によって、1930年代後半から日本の戦時体制が拡大し、38年5月に国家総動員法が施行されると、朝鮮人もそこに組み込まれていく。とりわけ41年の米国との開戦以降、日本人の成年男子が続々戦地に送られて労働力が逼迫するに伴い、労務に徴用される朝鮮人が急増していった。軍人・軍属として日本本土とアジア各地に送られる人も増大した。

1945年8月、ポツダム宣言の受諾によって帝国日本の解体が決まった。敗戦時、日本国内にいた朝鮮人は約200万人に膨れ上がっていた。そのうち約140万人は、敗戦から1年余りの間に故郷の朝鮮に引き揚げた。主に「戦時動員労働者」約30万人と軍人・軍属約10万人、さらに、戦後の混乱下で解雇された労働者、在日生活の基盤の弱い人たちが帰郷の途についた。^{*2}

この140万人に及ぶ朝鮮への帰還の中心になったのは、日本政府とGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による計画帰還で、福岡県など地方自治体独自の配船や、朝鮮人自身が漁船などを工面して帰るケースも少なくなかった。それは、敗戦時に朝鮮にいた約70万人の日本人の引き揚げとも関連していた。釜山^{プサン}などから日本に引き揚げて来る大小の船の復路に、朝鮮人が乗ったのである。

1945年10月に発足したばかりの在日本朝鮮人連盟（朝鮮人連盟、朝連）は、同胞の帰還のため積極的に活動した。徴用工を働かせていた企業に対し、未払い賃金の支払いや朝鮮帰還旅

費の支給交渉も行なっている。

敗戦直後の帰還ラッシュの中で、北部朝鮮に向かう人はどれくらいいたのだろうか。

日本—米軍政当局による北部朝鮮への計画帰還の希望登録は、1946年3月時点で9701人。米ソ間の協定に基づいて、47年3月と6月の2回、北部朝鮮への日本政府負担による公式帰還が実施されたが、佐世保から興南フソナムに向かう船に乗ったのはわずか351人だった。在日朝鮮人のうち、北部朝鮮出身者は約2%に過ぎなかったとはいえ、日米当局の想定をはるかに下回る少なさだった。^{*3}一度南部朝鮮に渡った後、北部に向かった人が少なくなかったともいわれるが実態は不明だ。ソ連占領下にあった北部朝鮮では、北朝鮮政権成立前から、富裕層から土地や財産を没収するなど社会主義的な施策が始まっていて、その影響で南部朝鮮に逃れてくる人が続出していた。そういう情報に接した在日朝鮮人の中に、北部への帰郷を躊躇ちゆうちゆう、保留した人が少なくなかったのかもしれない。

朝鮮半島は北緯38度線を境に、米ソによる分割統治が日に日に強まった。ほとんどの在日朝鮮人の故郷である南部朝鮮では、左右の政治勢力の対立や経済悪化、伝染病の流行などで社会混乱が深まっていた。一度帰還した後には、混乱を避けるために再び日本に舞い戻る人もいた。

「皇国臣民」から一転、日本国籍から放り出された在日

日本当局はGHQの承認を得ながら、「元日本人」たる朝鮮人の処遇において「外国人化」を図る。1945年12月には、まがりなりにも戦前に内地居住の朝鮮人が持っていた国政参政権を、「戸籍条項」を設けて停止した。続いて、日本国憲法施行の前日である47年5月2日に、最後の勅令として「外国人登録令」を公布し、在日朝鮮人、台湾人を「当分の間外国人とみなす」とした。この法令には、外国人登録の義務化と退去強制処分の規定が設けられ、のちの日本の外国人管理政策の原型となった。朝鮮人連盟は「在日朝鮮人の形成過程を無視し、事実上、朝鮮人を対象とする追放立法、管理立法である」として反対運動を繰り広げたが、最後は容認に転じ、初めて朝鮮人が外国人として登録された。47年末の登録者数は59万8507名であった。

1952年4月のサンフランシスコ講和条約発効に際して、日本政府は法務府民事局長名の通達を発し、旧植民地出身者は外国人とされ、日本国籍を喪失した。当事者たる在日朝鮮人、台湾人には、国籍を選択する機会は与えられなかった。

戦前、「皇国臣民」として日本の統治体制、戦時体制に組み込まれた在日朝鮮人は、植民地支配から解放されるや、このようにして「日本人」の埒外らちがわに放り出され、外国人として管理対

象となったのである。

朝鮮戦争勃発と在日の分断

1948年8月15日に大韓民国（韓国）が、9月9日に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が樹立される。50年6月25日に朝鮮戦争が勃発すると、在日朝鮮人の間でも激しい対立が生じた。朝鮮人連盟は建国後から北朝鮮支持を鮮明にした。反朝連の団体を糾合して46年10月に結成された在日朝鮮居留民団（民団）は韓国を支持した。朝連は朝鮮戦争勃発前年の49年9月に団体等規制令で強制解散させられ、51年1月に実質的な後継団体として結成された在日朝鮮統一民主戦線（民戦）は、日本共産党の指導を受けつつ、北朝鮮を祖国として防衛すると唱えて過激な反米闘争を展開した。

北朝鮮政府は1948年の建国以来、在日朝鮮人を自国の公民と位置づけていたが、民戦に対し、共産党の指導を離れて朝鮮労働党の指導を受けるよう方針転換を促し、55年5月に在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯、総聯）の結成に至る。

2 北朝鮮帰国事業の概要

朝鮮総聯が結成された後、北朝鮮政府はたびたび在日朝鮮人の帰国受け入れを表明し、これに呼応した総聯と共に帰国運動を活発化させていく。それは1959年に日朝赤十字を主体とした帰国事業として実現する（日本側は「帰還協定」「帰還事業」と称したが、本書では帰国協定、帰国事業とする）。84年に事業が終了するまで、日本人家族を含めて9万3340人が北朝鮮に帰国した。60年の統計を基準にすれば、在日朝鮮人人口の約16%、つまり6・5人に1人に及ぶ民族大移動となった。前述したとおり、ほとんどの在日朝鮮人の出身地は南部朝鮮であり、それは約98%に及ぶ。同じ朝鮮であっても、故郷ではない社会主義の北朝鮮を選んで帰国したところに、この事業の性格が現れている。

北朝鮮の思惑

社会主義国家の建設を推し進める北朝鮮には、韓国、日本、そして世界に社会主義の優位性をアピールするという狙いがあった。韓国に亡命した元朝鮮労働党書記の黄長燁ファンジヤンヨプは「韓国に*⁴対する北朝鮮の優越性を示す宣伝として利用した」と述べている。ソ連、中国、東欧など社会

主義陣営での北朝鮮の地位を高め、北朝鮮主導の統一への協力を求める意図があったと考えられる。

帰国運動は、冷戦対立の中で、

日本を韓国、米国から引き離そうとする北朝鮮政府の対日政策とも連動していた。1955年2月、北朝鮮の外相・南日ナムイルは、日本へ国交正常化を呼びかける声明を発表。同年5月に朝鮮総聯が結成されると、日本の革新勢力と連携しながら対日外交を積極的に展開していった。北朝鮮は朝鮮総聯への関与と統制を深め、帰国運動を推進する過程で、在日朝鮮人の間で朝鮮総聯の組織化、勢力拡大が進んでいった。

なお、朝鮮戦争で失われた労働力の量的な確保が北朝鮮の主目的であったという説があるが、それをはっきり示す文献は見当たらない。ただ、不足する技術者と企業家の帰国誘致策を打ち出し厚遇したとの記録が残っている。^{*5}本書でも、生産現場を指導できる幹部、技術者が不足していたため、帰国した在日の技術者が重宝されたという旨の証言を紹介している。金日成キムイルソン政権は、在日朝鮮人の帰国と時を近くして中国の



1961年5月19日に出港した第59次船。小島晴則撮影

朝鮮人、ソ連のサハリンの朝鮮人の帰国を推進しているが、労働力と技術者両方の確保が目的だったとされる。

日本社会で疎外された在日

1950～60年代の日本社会に、在日朝鮮人を帰国に押し出す要因Ⅱ生きづらさがあったことを指摘しなければならない。

前述したとおり、日本に居住する朝鮮人は、本人の意思確認の機会も選択の余地も与えられないまま、敗戦後は一方的に外国人とされ、日本での暮らしが不安定になった。法的地位はもちろん、国籍条項による制度的排除が新たにいくつも生まれた。1958年に法整備された国民健康保険、国民年金には加入することができなかつたし（生活保護は外国人には原則適用されなかつたが、「当分の間」これを認めるという運用によって支給を受けた）、公務員職や国鉄、郵便局などの公的機関にも就職できなかつた。公営住宅の入居からも排除されていた。

朝鮮人に対する蔑み、差別の視線は強く、在日朝鮮人を雇う民間企業は少なかつた。旧植民地出身の朝鮮人への関心は低く、共生していこうという社会意識は希薄であつた。社会を構成する一員として認められていないのだから、日本での暮らしに展望が持てないのは当然のことであつた。

こうした環境下で、多くの在日朝鮮人は貧困に喘あえいでいた。1955年に外国人登録された在日朝鮮人数は57万7682人だが、国勢調査では15歳以上で就労している人は14万6381人に過ぎない。56年から59年の朝鮮人の生活保護人員数はずっと8万人台で、人口の13〜15%で推移していた。日本人のそれは1・7〜2%だったので約7倍も多かったことになる。また貧困と環境が反映して在日朝鮮人の犯罪率は日本人より約6倍も高かった(59年^{*6})。また50年代前半、武装闘争を含む共産党の過激路線のもとで民戦も反政府、反米闘争の一翼を担ったことで、日本社会に「朝鮮人は怖い」「過激分子」というマイナスイメージが広がっていた。

日本社会と体制の一角には、在日朝鮮人は治安上、財政上の負担だとして、厄介払いのために帰国させようという主張があった。これは1950年代の国会における大臣の答弁や、新聞の論調の中にも見ることが^{*7}できる。

北朝鮮政府と朝鮮総聯による宣伝、惹句じやくく

社会の下層に留め置かれた多くの在日朝鮮人にとって、朝鮮総聯は、権利擁護のために闘い、金融機関をつくるなど互助組織として同胞の暮らしを助け、民族教育の場を維持してくれる頼もしい組織であった。また、亡国の民として辛酸を嘗なめた経験から、社会主義を掲げる北朝鮮を祖国として心の拠より所ところと捉とらえる人も多かった。さらに、金日成政権が1957年に教育援助

金約1億2000万円を送ったことによって、北朝鮮は在日朝鮮人に心を砕き希望を与えてくれる存在だと受け止められた。同時期の李承晩イスマン政権の韓国が、経済的困窮と政治弾圧、不正の横行で極めてイメージが悪かったこととは対照的であった。

金日成政権は「生活と仕事と教育の機会を保障する」として帰国を呼びかけ、朝鮮総聯はそれに呼応して「祖国に帰ろう」という大キャンペーンを展開した。皆が平等で、食べ物も住居も仕事もあり、無償で学びたいだけ学べ、医療も受けられる——「地上の楽園」という宣伝によって、10万人近い在日朝鮮人は、夢と希望と、そして幻想を抱き、北朝鮮に惹かれていくことになる。だが、そのほとんどが誇張と虚偽であったことを、本書に登場する帰国者たちは詳細に証言している。

3 聞き取り調査の目的

帰国事業については、これまで国際政治や日朝関係などの観点から多くの研究がなされてきた。だがそこには、当事者である帰国者が、北朝鮮に渡った後にどのような生を送ったのかについての言及は僅少である。体系的な記録作業や研究はあまりなく、在日朝鮮人史、日朝関係史の中に刻まれるべき重要事であるはずなのに、頁はほぼ空白のままだと言えるだろう。その

最大の理由は、北朝鮮が極度に閉鎖的で、自国民を強力な統制下に置く体制であり、たとえ北朝鮮を訪問しても、帰国者たちとの自由な接触や調査、取材が不可能だったことにある。

早くも1960年の前半には、物資や食糧の不足で厳しい窮乏生活をしていることを伝える手紙が在日家族に届き始め、続いて、70年代終わりに始まった在日家族の祖国訪問による再会で、帰国者たちの境遇の一端が漏れ伝わったが、情報は多くなかった。

北朝鮮を離脱して日本や韓国に入国した「脱北帰国者」が刊行した手記や聞き書きは、10冊を超える。どの本も、北朝鮮での生活について大変貴重な情報が記されている。ただ、綴つづられている個人の体験が帰国者に広く共通したものなのか、それとも個別的なものなのかを比較対照して判断するには情報が断片的で、「帰国者たちの生き様（あるいは死に様）」として理解するには限界があった。

そこで、日本と韓国に住む帰国者に可能な限り大勢会って、体系的な聞き取り調査をすることにした。最終的に、50人に長時間のインタビューをすることができた。

日本統治下の朝鮮から一族が渡日した経緯、北朝鮮への帰国に至った理由、清津港チヨンジンに降り立ってから18〜53年に及んだ暮らしの変遷、そして脱北に至るまで、細部にこだわって話を聞かせてもらった。調査は日韓にまたがる大きな規模になるため、2018年8月、事業主体として大阪に非営利の一般社団法人「北朝鮮帰国者」の記憶を記録する会*8を発足させた。

4 調査の概要

調査方法

調査は、対面聞き取り形式で50人に行なった。新型コロナウイルスの流行期にはオンラインも活用した。インタビューは、ひとり当たり平均7時間に及んだ。聞き取り内容は録音し、文字起こしをした。

聞き取り調査は2025年までに石丸次郎（ジャーナリスト）、金脛岡（ジャーナリスト）、文世一（大学教員）、宋毅（医療福祉従事者）、合田創（自由ジャーナリストクラブ理事）、洪敬義（NPO代表）、朴正南（翻訳家）、前田達朗（大阪産業大学教員）、朴香樹（人権活動家）、洪里奈（同志社大学博士後期課程）、洪麻里（ジャーナリスト）ら、計13人の調査員によって行なった。また、石丸次郎が99年から実施していたインタビューの内容も含まれている。

北朝鮮に住む帰国者と在日家族の間で交わされた手紙や写真、音声などの資料も収集した。

対象者の選定と限界

2025年12月時点で、北朝鮮で生まれた2世を含めて日本に約200人、韓国には約400人の脱北帰国者が居住していると見られる。聞き取り対象者を選定するにあたり、以下の点を重視、考慮した。

- 日本生まれで、帰国当時の記憶がある「帰国1世」で高齢の方を優先する。
- 北朝鮮生まれの「帰国2世」は直接の調査の対象外としたが、「帰国1世」の証言を補完、確認するために約20人に話を聞いた。
- 日本、韓国に入国した脱北民には、北朝鮮からの脱出に有利な、中国に近い北部地域に居住していた人が多い。地域的に偏り過ぎないように、中南部に住んでいた人を意識的に選定した。
- 朝鮮大学校出身者、朝鮮人女性と結婚した日本人夫、大村収容所出身者については、該当者に直接接触することができなかった。

対象者の内訳

● 調査時の居住地

居住地による対象者数は、日本23人（大阪12人、関東11人）、韓国27人である。朝鮮人男性と結婚した日本人妻が4人いた。

● 年齢と性別

1930年代生まれが5人、40年代生まれが25人、50年代生まれが16人、60年代生まれが4人である。この内、最年長は37年生まれ。最年少は68年生まれで、76年に8歳で帰国した。性別は女性30人、男性20人だった。

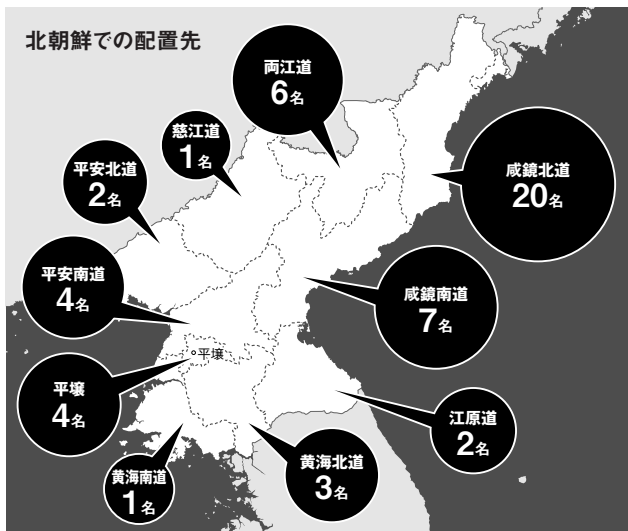
● 日本の出身地

日本の出身地は、東京、大阪、愛知、兵庫、福岡、石川、京都、山口、茨城、岩手、岐阜、神奈川、三重、福井、青森、宮城、鳥取、奈良、広島、岡山、滋賀、高知、大分である。

● 北朝鮮での配置先と帰国年度

北朝鮮での最初の配置先は、咸鏡^{ナムド}北道20人、咸鏡^{ナムド}南道7人、両江^{リヤンガン}道6人、平壤^{ピョンヤン}4人、平安^{アン}南道4人、黄海^{フアンヘ}北道3人、平安^{アン}北道2人、江原^{カンウオン}道2人、黄海^{フアンヘ}南道1人、慈江^{チヤガン}道1人である。南浦^{ナムポ}は平安南道に算入した。地域が偏らないように留意したが、脱北しやすい中国に近い北部の人が多い。1960年から63年末までに帰国した人が42人、70年代に帰国した人は8人である。

北朝鮮での配置先



5 凡例

本書では、朝鮮民主主義人民共和国の呼称を基本的に北朝鮮と記し、証言に沿って「朝鮮」「北」「共和国」と書く場合がある。また大韓民国の呼称を基本的に韓国と記し、「南朝鮮」「南」と書く場合がある。

また、「北鮮」など現在では差別的表現として使用しない地名や呼称、「ゲンチャン」といった現地住民に対する蔑称あるいは「乞食」「土方」「部落」など社会風俗に関する差別的な表現についても、帰国事業が始まる前後の社会意識を反映する用語として、また当時の実際を記録に留める意味でも、証言や文書、手紙の

中に出てくる場合はそのまま記している。朝鮮語の手紙や文書、文献の引用で翻訳者が明示されていないものは執筆者による翻訳である。

証言者の名前は、北朝鮮に残る家族の安全問題や、日本と韓国での生活上のプライバシーの観点から、本人の意向を尊重して仮名にした人がいる。また日本の出身地、生年月日、帰国年度、北朝鮮での配置先などを伏せた場合がある。

また、北朝鮮での人生を主に扱うため、地名・人名は北朝鮮での発音に従ってルビを振る。原則、朝鮮名での表記とするが、本人が日本名を希望する場合は日本名での表記とした。文中の敬称は略した。

なお、本書では国籍のいかんにかかわらず、朝鮮半島出身者およびその子孫の総称として在日朝鮮人、及び在日の語を用いている。

本プロジェクトの調査活動には、約300人の市民から寄付を頂いた。また、韓国の以下の団体から調査助成を受けた。謝意を記したい。

財団法人「統一と分かち合い」(Unikorea Foundation 2019～2022年)

アジア研究基金 (Asia Research Fund 2021～2022年)

韓国学中央研究院 海外韓国学支援事業 (2024年)

北朝鮮地図



帰国事業による帰国者数の年次推移

年	回数	帰国者数	うち 日本国籍者数
1959	3	2,942	225
1960	48	49,036	3,937
1961	34	22,801	1,773
1962	16	3,497	186
1963	12	2,567	165
1964	8	1,822	99
1965	11	2,255	96
1966	12	1,860	53
1967	11	1,831	108
1968	中断		
1969			
1970			
1971	7	1,318	58
1972	4	1,003	22
1973	3	704	
1974	3	479	
1975	3	379	
1976	2	256	
1977	2	180	
1978	2	150	
1979	2	126	
1980	1	40	2
1981	1	38	4
1982	1	26	2
1983	0	0	0
1984	1	30	
累計	187	93,340	6,730

出典『北朝鮮帰国事業関係資料集』 p341

※若干の中国人がいたが省略した。空白年は正確な資料がなかった。

関連年表

1945年	8月15日 日本がポツダム宣言受諾を発表。無条件降伏、敗戦
	10月15日 在日本朝鮮人連盟（朝連）結成
1946年	10月3日 在日本朝鮮居留民団結成
1948年	8月15日 大韓民国成立
	9月9日 朝鮮民主主義人民共和国成立
1950年	6月25日 朝鮮戦争勃発
1952年	4月28日 サンフランシスコ講和条約発効。在日朝鮮人の日本国籍を喪失させる
1953年	7月27日 朝鮮戦争休戦協定調印
1955年	2月25日 北朝鮮の南日外相が日本へ国交正常化を呼びかけ
	5月25日 在日本朝鮮人総联合会（朝鮮総聯）結成
1958年	7月14日 金日成がソ連代理大使ペリシェンコに在日朝鮮人受け入れの意思を示し、支援を求める
	8月11日 総聯川崎支部中留分会が金日成に帰国嘆願の手紙送付を決議。大規模な帰国運動の始まり
	9月8日 金日成が在日朝鮮人の帰国を歓迎する旨言明
	11月17日 「在日朝鮮人帰国協会」（帆足計幹事長）が結成される
1959年	2月2日 民団が「北送反対闘争委員会」を結成
	2月13日 岸内閣、北朝鮮帰国実施を閣議了解
	6月15日 韓国が帰国事業への対抗策として対日通商断交を表明
	8月13日 インドのカルカッタにおいて、日朝赤十字間で「在日朝鮮人の帰還に関する協定」調印
	12月14日 第1次帰国船が新潟港を出港
1960年	4月19日 韓国で「4.19学生革命」、李承晩政権崩壊へ
1965年	6月22日 日韓基本条約調印、国交正常化
1967年	6月 労働党が「党の唯一思想・唯一指導体系の確立」を決定。金日成一 人独裁を公式化
	11月12日 帰還協定が終了
	12月22日 第155次船の出港を最後に帰国事業が中断
1971年	5月14日 帰国未了者の暫定措置として帰国事業が再開。第156次船が出港
1984年	7月25日 第187次船が出港。帰国事業が終了

本書に登場する帰国者のプロフィール

朴永淑^{パクヨンスク}…1940年広島市出身。兄の事業の失敗と帰国運動が重なり、先に両親と10人兄弟姉妹のうち7人が帰国。父危篤の知らせを聞き、62年12月16日、第101次船に乗って帰国。家族の住む平安北道新義州市^{ピョonganプクドシニジュ}へ配置。兄2人、息子2人が連行され死亡した。

梁葉津子^{リヤンハツコ}…1943年大阪に生まれ、すぐに石川県加賀市へ移る。中学卒業後は工場勤務。生活に苦勞する両親に朝鮮総聯が帰国を勧誘。子供の教育や、統一すれば故郷（南）^{ナム}に帰れると考えた父親が帰国を決意。両親と弟妹4人と共に60年6月17日、第26次船で帰国。咸鏡北道会寧市^{フエリョン ユン}游仙^{ユソン}へ配置。帰国者男性と結婚し理髮所に勤めた。

梁敏雄^{リヤンミンオ}…1945年石川県加賀市出身。梁葉津子の弟。日本に残った兄が支援を続けてくれたおかげで生活が支えられた。炭鉱労働に従事。

金綾実^{キムリンシル}…1947年福岡市出身。7歳の時に父が病死。5人の子供を抱えた母に対し、総聯が

仕事を紹介するなど世話をした。民族差別と困窮、総聯の宣伝などが相まって、母が帰国を決意。結婚していた長姉を除いて、母、姉弟妹と共に60年4月8日、第16次船で帰国。咸鏡北道鏡城郡へ配置。79年、李昌成リチャンソンと再婚。98年に夫と2人の娘と共に中国に脱出、2000年にロシアを経て韓国入りした。

金五月キム オウオル…1938年福岡県生まれ、山口県岩国市育ち。朝鮮学校で学ぶが、学校閉鎖令により日本の学校と行き来した。母は熱心な総聯活動家で、自身も総聯で仕事をした。60年、姉夫婦が先に帰国し、孫を恋しがる母も帰国を決意。自身も祖国では差別がないだろうと考え、同年に両親と帰国。咸鏡北道茂山郡ムサンへ配置。61年に帰国者男性と結婚後、困窮生活と慣れない農作業で苦勞した。

姜鐘太カンジョンテ（仮名）…1941年岩手県釜石市出身。共産主義を信奉した父は、総聯釜石支部委員長を務め、鐘太を朝鮮人として育てるため、東京朝鮮中学・高校へ送った。統一すれば故郷の全羅南道チヨルナムドに子供を定着させようという父の考えで、61年に一家4人で帰国。母は日本人。咸鏡北道清津市チヨンジンへ配置。清津医科大学に進学し医師になった。68年に労働党に入党。

金奎錫^{キムギョク}（仮名）

1938年仙台市出身。両親を早くに亡くし、兄に育てられた。ロシア文学愛好から社会主義革命に傾倒し、大阪の総聯生野支部の青年同盟に加入。熱心に同胞青年に帰国を勧誘宣伝した。韓国革命参加に傾いた時期もあつた。総聯からの命で61年冬、単身で帰国。咸鏡北道金策市^{キムチエク}の製鋼所へ配置。一家心中を考えるほどの貧窮生活を送つたが、義姉の訪朝を機に実兄の支援が始まり暮らしは楽になった。

川崎栄子…1940年代京都府出身。日本の公立校に通つていたが、生活苦を理由に高校進学を断念せざるを得ない中、総聯からの誘いで奨学金を得て京都朝鮮高校へ進学。社会主義を自分の目で見学しようと、60年代に単身で北朝鮮に渡る。東海岸地域へ配置され寄宿舎生活を送つた。パルチザン派の親戚を持つ「成分」のいい男性と結婚の際は、帰国者ゆえに強い反対にあつた。大学卒業後、機械の設計士として働いた。

上田つたえ…1937年宮城県気仙沼市^{けせんぬま}出身の日本人妻。貧しい母子家庭で育ち、小学生の頃から家計を支える。中学卒業後、住み込みで働く旅館で出会つた朝鮮人と結婚。60年に夫と北朝鮮に渡り慈江道龍林郡龍雲鉸山^{チヤンガンドリヨンリム リヨソウソ}へ配置。翌年、病気で長男を失つた。2年後に咸鏡北道鏡城郡に移る。食糧確保のために交渉して畑を獲得し、自作農のように生活した。

李昌成^{リチャンソン}…1941年岡山県和気郡^{わげ}出身。北朝鮮で柔道家として活躍できるといふ誘いを受けて、家族が猛反対する中、62年4月21日、第92次船に乗って単身帰国。平安南道成川郡^{ソンチヨ}のニッケル鉱山へ配置。帰国者の若者グループの一員となり、暴力沙汰を起こして3年半半教化所に入れられた。79年、金綾実と結婚。

李淑子^{リスクジヤ}（仮名）…1947年茨城県出身。幼少期に父が亡くなり、母が女手ひとつで子供4人を育てた。母は帰国事業を率先して宣伝した。朝鮮中学在学時の60年春に、母、兄2人と共に帰国し、咸鏡北道へ配置。姉も2年後に家族と帰国。小学校では2学年下に編入したが、授業についていけず苦勞した。中国からの帰国者と結婚。

黄玉香^{ファンオクヒヤン}（仮名）…1940年代関西地方出身。大きな養豚場を経営し熱心な総聯活動家だった父が祖国への貢献を強く希望し、60年代に一家で帰国。南西部へ配置。68年に尹尚吉^{ユンサンギル}と結婚。日本の親族から多大な支援があり経済的には不自由ない暮らしを送った。

李秀漣^{リスリヨン}…1948年福岡県の炭鉱町出身。父は熱心な総聯活動家だった。両親と兄妹弟の一家

5人で60年2月26日、第10次船で帰国。咸鏡北道鏡城郡へ配置。暮らしに絶望し、帰国後3カ月で自殺を試みたが地元の人に助けられた。日本の兄からの仕送りが途絶え、90年代半ばの「苦難の行軍」期には米の担ぎ屋や砂金の運び屋などで延命。98年に中国に逃亡し、3年半後に韓国入りした。

羅真弓^{ラジンゴン}(仮名)・1950年東京都江戸川区出身。朝鮮人の父と日本人の母のもと、裕福な家庭に育つ。父は総聯の分会長を務め、朝鮮大学校設立時に多額の寄付をした。63年秋に一家全員で帰国。咸鏡北道清津市へ配置。脱北するまで生活に苦労はなく、富裕層の帰国者コミュニティで過ごした。

赤塚君子・1947年山口県宇部市出身。無償教育や無償医療という宣伝に惹かれ、母が帰国を強く希望し、父の反対を押し切って60年9月に一家で帰国。父が炭鉱で働いた経験があったことから、咸鏡北道会寧市游仙炭鉱へ配置。結婚後、同じ宿舎に住む帰国者が酒席で金日成^{キムイルソン}を批判して追放された。

小林秋子(仮名)・1943年東京都出身の日本人妻。朝鮮人の夫が職場で差別を受けたなど

の事情が重なり、義母、夫と共に生後間もない長男を連れて63年に帰国。咸鏡南道へ配置。強烈なホームシックで1年間は外出もせず泣き暮らした。77年に夫を失い、「苦難の行軍」期には飢えを経験した。

有元俊..ありもととしゆん1954年東京都品川区出身。在日2世の父は東京大学法学部時代から共産党員として活動し、東京朝鮮高校の再建メンバーだった。日本人の母と共に一家で60年7月8日、第29次船に乗って帰国し平壤ピョンヤンへ配置。父はインテリ幹部待遇を受けた。金策工業大学に進学し、高級エンジニアとして働いた。

尹尚吉ユンサンギル(仮名)..1945年岐阜県出身。父は総聯地方支部の宣伝部長だった。フアン黄海南道出身の祖母が帰国を希望し、60年代初期に祖母と両親、弟2人と共に帰国。黄海道へ配置。2000年に脱北するまで、日本の親族の支援で妻・黄玉香と2人の息子と不足なく暮らした。

呉明子オミヨンジヤ(仮名)..1951年大阪府出身。きょうだい5人とも朝鮮学校に通う。帰国事業が盛り上がり、毎月帰国する同級生を見て羨ましくなったきょうだいが親に帰国しようとせがみ、60年初頭に一家7人で帰国。咸鏡南道の山深い鉾山地帯へ配置。74年の帰国者男性との結婚を

機に、平安南道に移った。

榊原洋子さかきばらひろこ…1947年広島県出身。物心つく前に、子供のいない朝鮮人の夫婦の養子になった。9歳の時に養母が脳出血で倒れたのを機に、総聯が毎晩のように帰国を勧め、自身も困窮した生活ゆえ、帰国を望んだ。61年5月26日、第60次船で両親と共に帰国。咸鏡北道鍾城郡チヨソン（現・穩城郡オンソン）の協同農場に配置直後から、空腹に苦しんだうえ、養父が精神を病んでしまった。教員を経験後、帰国者と結婚。

権成明クオンソンミョン（仮名）…1950年福岡県出身。炭鉱夫たちを集めて土工の人夫出しをしていた父が体調を崩し、生活が傾いた折に知り合いの総聯幹部に帰国を勧められた。叔父に続き、両親、3兄弟、長男家族の計11人で61年春に帰国。僻地へきちの両江道大紅湍リヤンガンへ配置デホンダン。74年に曹分姫チヨブンヒと結婚。姉が祖国訪問したのを機に手厚い支援を受け、裕福に暮らした。

朴文俊パクムンジュン…1945年鳥取県米子市よなご出身。総聯活動家だった父の主導で、両親と弟、3人の妹と共に60年8月26日、第36次船で帰国。咸鏡北道清津市へ配置。父が配置された牧場で足を大怪我おおして働けなくなり、配給を受けるために専門学校を中退して職場に出た。弟の喧嘩沙汰けんかを

理由に農村に追放、飢えのため98年に中国に逃亡。

申敬順シンギョンス（仮名）…1949年茨城県出身。母は日本人。総聯の熱心な活動家だった父が「故郷で病を治す」と子供3人と養子縁組した甥おひひとりとを連れて、60年春に帰国。咸鏡北道清津市へ配置。父が帰国1年で死去し、職場に出た母を長女として支え、自身も高校進学をあきらめて工場に勤めた。

曹分姫チヨフヒ（仮名）…1954年岐阜県出身。土木の仕事で、父が山崩れに巻き込まれ大怪我。母も死産を機に働けなくなり生活保護を受けるように。中学卒業後、働いて家計を支えている折に総聯から勧誘を受け、両親と弟妹の一家5人で、71年に帰国。両江道ヘサン恵山市へ配置。74年に権成明と結婚。義姉の祖国訪問を機に生活が楽になった。

李泰昇リテギョソ…1952年山口県下関市出身。両親は総聯系ではなかったが、北朝鮮に渡ることが、南の故郷キョソサン（慶尚北道慶州）へ戻る最短ルートだと考え、帰国を決意。下関朝鮮初中級学校2年時だった60年6月、一家7人で帰国。平安南道へ配置。「苦難の行軍」期には黄海北道ソソリム松林市に住み、軍による黄海製鉄所の不正摘発事件を目撃した。

フアンシキョ
黄美京（仮名）…1957年九州地方出身。子供たちがいじめられることに両親が胸を痛め、帰国を決意。両親、姉、兄2人、妹と共に60年代初頭に帰国。咸鏡道の炭鉱へ配置。調査した50人の中で最貧の暮らしを送った。父は帰国1年で病気で働けなくなり、日本人の母が建設の仕事に出た。北朝鮮で弟妹も生まれた。現地の生徒よりも貧しく、幼少期に楽しい思い出はないという。

キムジュン
金柱聖（本名・金潤）…1963年兵庫県川西市出身。朝連発足時から熱心な活動家だった祖父は、土木の仕事で築いた財を活動に捧げた。尼崎の朝鮮中学1年時、帰国に強固に反対した父を振り切り、祖父母と共に76年10月1日、第177次船で帰国。平壤へ配置。祖父の病状悪化で伯父家族の住む黄海南道信川郡へ移る。平壤の富裕帰国者の暮らしをよく知る。

シムバクイン
沈博仁（仮名）…1952年兵庫県尼崎市出身。父が妻子の生活を案じて帰国を勧め、母が子供6人を連れて60年夏に帰国。咸鏡北道鏡城郡へ配置。すぐに馴染み、学校生活を謳歌しスポーツで活躍した。3年遅れで帰国した父が79年に保衛部に連行され、耀徳管理所に送られた。

金栄三^{キムヨンサム}…1959年大阪市西成区^{にしなり}出身。父親は総聯大阪府本部の専任活動家だった。総聯が両親に子供を北朝鮮に送るよう求めたため、朝鮮中学3年時の73年6月15日、両親と姉の一家4人で第168次船に乗って帰国。江原道元山市^{カンウォンドウオンサン}へ配置。勉学に励んで金策工業大学に進学。90年代の混乱期から、ゲームセンターや貿易業で稼いだ。

文賢一^{ムンヒョンイル}…1948年高知県出身。故郷の慶尚北道慶州で中学の教師をしていた父が再び教職に就くことを希望し、帰国を決意。直前まで自身が朝鮮人であることを知らなかった。母は日本人。両親と共に60年8月26日、第36次船で帰国。咸鏡北道清津市へ配置。北朝鮮の実情に失望し、3年後に二度中国へ越境して逃亡を図った。現地女性と結婚する際は、相手家族から猛反対を受けた。

金幸一^{キムヘンイル}…1941年愛知県岡崎市出身。熱心に同胞に帰国を宣伝する父の姿に影響を受け、61年6月9日、第62次船で単身帰国。咸鏡北道雄基郡^{ウンギ}(現・羅先市^{ラソン})へ配置。北朝鮮に幻滅し、翌年に軍事境界線を越えて韓国に脱出し、その後韓国で暮らす。帰国事業を止めるための発信を続けた。

尹玉順インオクスン（仮名）…1950年代、東京都出身。母は日本人。父が総聯活動に熱心で、子供たちを連れて故郷（南）に帰ろうと帰国を決意。60年代初期に両親と兄弟弟4人で帰国。黄海道へ配置。軍に入隊し労働党員にもなった。義兄が政治犯として捕まった。

許恩慈ホウンジ（仮名）…1940年慶尚南道咸安ハマンに生まれ、6歳の時に両親と渡日。愛知県名古屋市中で暮らす。早くに父が亡くなり、母と闇米の商売を切り盛りして弟妹4人の生活を支えたが母も病死。おじが妹を連れて60年に帰国すると、その3カ月後、妹を追って同年秋にひとりで帰国。南浦市ナムポへ配置。中国からの帰国者と結婚した。

齋藤博子…1941年福井県鯖江市さばえ出身。日本人妻。夫の家族が総聯の勧誘を受け帰国を決意。義母に子供を連れて行くと宣言され、仕方なく夫の家族と共に61年6月16日、第63次船で帰国。両江道恵山市へ配置。食べる心配と夫の暴力に苦しんだ。「苦難の行軍」期は、不法行為にも手を染めながら生き延びた。

具龍徳クリヨンドク（仮名）…1960年代半ば関西地方出身。日本人だった母とは幼少期に死別した。父は総聯へ多額の寄付をして貢献した。長兄が日本での将来を悲観して帰国を熱望し、父と3人

の兄姉と共に70年代初期に帰国。黄海北道へ配置。75年に父、義母、義弟と共に耀徳管理所へ送られたが3年後に出所した。

呉小元^{オソウオン}(仮名)・・1957年東京都出身。対南工作活動に従事していた済州島^{チエジュド}出身の父が日本の公安当局に摘発されたのを機に、北朝鮮当局が息子を送るよう要求。3兄弟は1973年に帰国。自身は平壤体育大学、次兄は金日成総合大学、三兄は金策工業大学へ優待進学したが、皆強いストレスに苦しんだ。

李在元^{リジエウォン}・・1948年東京都大田区出身。母は日本人。東京朝鮮高校中退。両親の離婚を機に非行の道へ。父の故郷・韓国に「退去」することを決めたが、「社会主義の祖国に行こう」と主張する妹・栄順^{ヨンスン}に説得され、弟・在学と3人で72年8月25日、第165次船で帰国。両江道恵山市へ配置。栄順は精神を病んだ。81、82年に母が訪問団で訪朝、87年には父が訪朝し、そのまま北朝鮮に留まった。

李在学^{リジエハク}・・1958年東京都大田区出身。李在元の弟。日本を離れる1週間前に帰国を知らされた。栃木の朝鮮中学3年時のことだった。現地の中学では1学年下に編入し、必死に適応しよ

うと努力した。機械工場で働いた。

張智潤チヤンチユン（仮名）…1959年東京都出身。闘病中の父を「帰国すれば病院代も子供らの教育も心配ない」と総聯が勧誘し、東京朝高在学中の76年に両親、弟妹3人と一緒に帰国。咸鏡南道へ配置。教師になり、結婚後は清津市に住んだ。90年代後半の社会混乱期からの三度の脱北企図の末、2003年に日本へ戻った。

張美淑チヤンミスク（仮名）…1968年東京都出身。張智潤の妹。94年に帰国者2世と結婚するが暴力に悩まされた。離婚後の生活苦で始めた日銭稼ぎの暮らしが限界に達し、一人息子を兄に預け、ブローカーを頼りに中国に越境し、智潤と共に日本に戻った。

金初美キムチヨミ…1941年福島市出身。中学卒業後はパチンコ店で働く。総聯の活動家だった兄に影響され、両親、腹違いの兄と4人で、60年7月22日、第31次船で帰国。平安北道龍川リョンチヨソ郡へ配置。75年に総聯幹部の兄が訪朝した際には、当局が住居を整備してくれた。93年に神戸出身の夫と共に脱北。

カンヤンジャ
姜洋子

1951年山口県出身。電気のない山村農家で育つ。祖父母から3代にわたり、稲作や畜産で生計を立てた。宣伝に使われた北朝鮮のカラー写真集を信じた母が主導して帰国を決めた。61年、両親と弟3人と共に帰国。咸鏡北道穩城郡へ配置。北朝鮮でさらに弟2人が生まれた。配給が途切れると数日食べられない生活をしていたが、79年に日本で道路補修の会社を経営して成功した叔父が平壤の道路整備に貢献すると、生活が一変した。

チヨンボクソン
鄭福仙

1948年京都府出身。両親の離婚後、家出した姉が水商売をしていることに立腹した父が子供を連れて帰国を決意。北朝鮮に行けば、子供たちが学び、働き、真つ当に暮らせると信じた。父と姉、兄2人と共に60年8月12日、第34次船で帰国。江原道文川^{ムンチヨン}市に配置。19歳で帰国者男性と結婚し、翌年に追放処分。95年頃に富裕帰国者が一斉摘発された元山事件に巻き込まれた。

なお、聞き取り調査をした帰国者は50人だが、本書に証言を掲載しなかった人、プロフィールの掲載を望まなかった人がいる。

プロローグ
ある在日一家の写真記録



父・全三峰と母・朴己連。帰国前に米子にて



全三峰一家。(前列右から) 朴己連、全三峰、己連の母・曹洪子、長男・富潤、次男・貴潤。
(後列左から) 富潤の妻・李芳子、三女・福順、次女・文子、三男・榮潤、四男・花潤、五男・明潤、長女・貴美、貴美友人。1953年8月15日、米子の自宅横にて。下線は帰国した人